

パレスチナ蜂起は八カ月目に突入した。六月初めに開かれたアルジェ・サミットでのパレスチナ人民の勝利は被占領地人民の闘いを励ました。また、その物質基盤を強化した。しかし、この蜂起の発展にもかかわらず、パレスチナ革命は再び分裂の危機にある。これはバッサム・アブ・シリヤリフ氏の発表した「イスラエル」との新たな和平提案をめぐるPLOとの内訳による争いと、それを口実としたファタハ反乱派によるペイレート

のキャンプからのアラファト議長派の一掃である。また、これはシリア、

PLO関係の悪化としてあらわれて、蜂起の発展の方向をめぐることの矛盾は、また、大統領選を前にしたレバノンをめぐるシリアとの矛盾としてもある。一方シオニストは、

九号において、全面的な市民不服従運動への発展のためにさらに、「民権」に働くパレスチナ人に辞任を呼んで蜂起を解決する立場を強め、同時に米帝はジョニストへの軍事的な作戦への警戒を呼びかけた。これは、シオニストが蜂起の攪乱のために偽支援を強化している。

被占領地の人民の闘いは、在外のリーフレットを撒いたり、パレスチナ人同士の対立をあおるためにさ

まざまな戦術を使っているからである。また、蜂起民族統一指導部は、はじめてシオニストの権益の破壊と焼き討ちを呼びかけた。これは、シオニストの経済にさらに打撃を与えることを狙つたものであった。

二〇号では同様に、「民政」に働

## 蜂起の発展とパレスチナ革命の矛盾

一九八八年七月一〇日

### 一 蜂起とシオニスト

蜂起民族統一指導部はアピール一

### 目次

蜂起の発展とパレスチナ革命の矛盾	1
PLO被占領地蜂起民族統一指導部アピール18号(資料①)	8
PLO被占領地蜂起民族統一指導部アピール19号(資料②)	9
パレスチナ合意文書(資料③)	10
アブ・アリ・ムスタファ声明(資料④)	12
金一パレスチナ蜂起の中心的要素 エミレット・ニュース(資料⑤)	12
重要日誌(1988年6月11日~7月10日)	14
34号正誤表	15
東京後記	16



発行 ウニタ書舗  
東京都千代田区神田神保町1-52  
TEL. (03) 291-5533  
編集 J.R.A.  
郵便振替 東京1-48443  
三菱銀行神保町支店 当座9012656  
会員制 年会費20000円

18 購入などを口実に、米帝からの軍事協力を引き出している。戦争大臣ラビンは、六月二三日訪米し、米帝にシオニストの主張を受け入れさせ対ミサイル・ミサイルの共同開発に合意させている。レーガン政権は、レーガンの後継者であるブッシュ副大統領にユダヤ投票を集めるために、和平の進展よりもシオニストへの支援を強化することに重点をおいた。シユルツは中東に登場しなくなった。

こうしたパレスチナをとりまく情勢を背景に、PLOは蜂起の第三段階への突入を宣言している。これは現在の蜂起を全面的な市民不服従運動に発展させることを意味している。人民委員会を基礎に人民権力の形成を行い、蜂起の強固な基盤を作り上げた被占領地人民の闘いは、全面的な市民不服従運動を完成させる段階に入った。これはシオニストをいつそう凶暴にさせていくことになる。そして、闘いの次の地平は武装闘争を再開することに至るだろう。

ハツサム・アブ・シャリフ文

な分裂の危機に陥った。アルジェ・サミットでアラファト議長のアドバイザーであるアブ・シャリフ氏が配布した文書が米欧に配布され、その後BBCなどがアブ・シャリフ氏についてインタビューを行った。この文書は第一に「イスラエル」とパレスチナの直接交渉を呼びかけ、第二は、PLOがパレスチナ人民の唯一合法の代表であることを確認するための住民投票を行うとしている。これはパレスチナ民族評議会の決議にまったく反したものである。米帝はこの文書に関心を示している。これがPLOの組織的見解かどうかを知りたがつた。これに関してインタビューでアブ・シャリフ氏は、これがアラファト議長の考え方とも一致しているものであると答えた。また六月二三日東ベルリンで開かれていた平和会議に出席していたアラファト議長は、直接これが彼の見解かどうかという質問に答えず、「彼らから（文書に関する）質問に、ジャーナリストをとおしてではなく答える用意がある」という形で彼の見解であることを間接的に認めた。またアラファト議長のアドバイザー、ハレド・アル・ハッサンは米帝との直接的な話し合いをアブ・シャリフ文

書に基づいて行う用意があることをワシントン・タイムズとのインタビューで答えている。米帝は、これがPLOの見解であるとするなら、PLOの立場が変わったことであるとして、アブ・シャリフ組織は、一齊にこのアブ・シャリフ氏の文書を批判し、アルジェのPNCの決議に違反するものであり、蜂起を弱め、民族的統一を破壊するものであると非難した。アラファト議長のアンマン合意をめぐつてPLOが、アラファト議長派と反アラファト議長派に分裂したことを克服し、アラファト議長派がアンマン合意を破棄することで一九八七年四月のPNCの統一大会をかちとつたものを再び分裂へ導くとして批判している。蜂起のなかで民族的統一が強化されPLOに復帰していくなかつたPFLP-LPGCも統一への方向を強め、また、シリアとの和解も始まっていたときに、このアラファト議長派の行動は再びこの統一の気運を破壊し、分裂を持ち込むことになった。PFLPはPNC決議に違反した行動であり、分裂を導くものであると批判

し、DFLPなども同一の論調で非難した。PLOに所属しないPFLP-PICも民族的統一を破壊するものとして非難した。また、ファッタハ革命評議会派はアブ・シャリフ氏を「第二のイサム・サルタウイである」と決めつけ最大級の非難を行った。

これは、前月から続いていたペイント郊外のシャティラ、ボルジバラジネキヤンプでのファッタハ反乱派（アブ・ムサ派）とアラファト議長派（アラファト議長派との戦闘に大きな影響を与えることになった。アラファト議長派は、シリアとPLOの和解の進行のなかで公然とペイント郊外のキャンプに登場し、アブ・ムサ派をシャティラキャンプから追い出し、その力を示した。パレスチナ各組織は、PLOに入つていらないPFLP-PICまで含めて、蜂起の発展に悪影響を与えるこの戦闘を止めさせようとしたところわけ、注目されるのは八三年の時にはトリポリからアラファト議長を追い出した主勢力であったPFLP-PICがアブ・ムサ派を止めようとしたことである。GICも蜂起の発展を考え民族統一こそが被占領地内の人民蜂起をささえることを確信しており、アブ・ムサに対しても戦闘停止を要求していた。

くパレスチナ人の辞任を呼びかけた。また、国連に対し、パレスチナ人の保護と、ジュネーブ憲章に基づくパレスチナ人の合法的権利の実現の保証を呼びかけた。

被占領地人民は、蜂起をさらに強めている。シオニストは、蜂起が勃発したように見せるために再開した学校を、再び閉鎖しなければならなかつた。高校生を中心に、再開された学校で、シオニストに対する抗議行動を行い、シオニスト兵と鬭つた。このためシオニストは再び学校の閉鎖を行つてゐる。その数は一二〇〇〇校に及んだ。危機意識を強めている極右シオニストのセツラーはいつそ凶暴化し、パレスチナ人のキヤンプや村に自動小銃を乱射するなど、また、西岸ではパレスチナ人の小学校を襲うなどの蛮行を行つた。この明確なパレスチナ人の虐殺を意図した行動は、シャミルとラビンによつて奨励されている。ラビンはすでにセツラーに対して「生命の危険」があれば発砲してよいと許可をあたえている。シオニストは火炎びんを投げたという口実でパレスチナ人の家の破壊を増大させた。さらに税金の支払いをボイコットしていることに対しても、その人々の家を急襲

し、脅迫を行つた。また、シオニストトは、東エルサレムのアル・アクサ・モスクに対し考古学的発掘を口実に付近を掘り返し、再びモスクの聖地を侵した。エルサレムのパレスチナ人の怒りを引き起こし、エルサレムでのパレスチナ人とシオニスト兵との最悪の衝突に発展した。この怒りは西岸全土での抗議行動に拡大した。また、極右シオニスト・セツラーは、パレスチナ人の農地に放火し、パレスチナ農民の生活を脅かしている。

四八年ラインのパレスチナ人民もまた、その闘いを強化し、テルアビブでの火炎びんの投げきなど「イスラエル」内でのシオニストに対する攻撃を強めている。また、シオニストは四月以来一万四五〇〇ヘクタールの森が火事によって損害を受けており、これもパレスチナ人が放火したものと決めつけている。四月以来増大してきた森林火災はシオニストの経済に深刻な影響を与えている。

シオニストの戦争相ラビンは、六月一三日段階で一億五四〇〇万ドルの蜂起鎮圧のための追加予算を財務省に請求した。すでに蜂起が始まつて以来二億五〇〇〇万ドルをシオニスト軍は支出している。蜂起の長期

化はシオニストの経済的危機を悪化させる構造になつてゐる。また、すでに危機にある生産的産業のみならず、イスラエルの主要産業のひとつである観光において、収入が三〇%減になつてゐる。

スト資本を占領地に誘致することによってセツルメントの建設だけではなく、シオニストの工場をたてることによって、併合を既成事実化している。これに見られるように極右シオニストは蜂起の長期化のなかでユダヤ人の危機意識を反映し、その発言権を強化し、影響力を拡大している。

一月の「イスラエル」の総選挙にむけた各党の候補者順位を決定する党大会では、リクード・ブロックの中核であるヘルート党の候補の第1位に、極右シオニスト・ラビ・レビがなり、第2位にはアリエル・シヤロンがなった。労働党に対する優位を保っているリクード・ブロックの極右シオニスト勢力の拡大は、次期政権がさらにその人種主義的、ナチ的性格を強めることを意味している。

こうした極右シオニストの勢力拡大と同時に、蜂起鎮圧にかりだされている軍人が、政府は真剣に問題を政治的に解決しようとしている。抗議を行っている。

力による虐殺でしか解決の道を持たないシオニストは、米帝との軍事的な共同を強めている。シオニストは、サウジの中国製の中距離ミサイル

しかし、左派側もまた、このアラ  
ファト議長の動きに対し、蜂起の  
強化を主張するのみである。左派に  
いわせれば、現在の蜂起の力だけで  
米帝が屈してくると考えるのは幻想  
であり、闘争の強化を行うことによ  
つてのみ、あらたな地平を切り開け  
るとし、全面的な市民不服従運動の  
貫徹をとおして、その闘争の発展と  
して、武装闘争を再開することを展  
望している。しかし、これもシオニ  
ストに妥協を強いるための力関係を  
どのように作り出すのかという点で  
は、明確な方向を持ちえていない。  
彼らが期待するソ連ば、もともと P  
L O に 対 じ て 「イ ス ラ エ 尔」 の 承 認  
を 求 め て お り 、 P L O と 「イ ス ラ エ  
ル」 の 相 互 承 認 の 基 盤 の 上 に 国 際 会  
議 由 く 解 决 の 立 場 を と っ て い る。  
し か し 、 シ オ ニ 斯 特 は 、 一 貫 し て 実  
効 力 の あ る 国 際 会 議 の 開 催 に 反 对 し  
米 帝 の 「 和 平 工 作 」 の 失 敗 の 原 因 と  
な っ て い る。ま た 、 シ オ ニ 斯 特 自 身  
は 、 唯 一 ヨ ル ダ ン と の 直 接 交 渉 のみ  
を 望 て い る。し か し 、 シ オ ニ 斯 特  
は 占 領 地 を 手 放 す 気 は ま つ た く な い。  
シ ュ ル ツ 案 を 認 め る 労 働 党 で す ら ヨ  
ル ダ ン に 返 還 す と し て い る の は 、  
ア ラ ブ 人 の 居 住 す る いく つ か の 村 や  
町 のみ で 、 エ ル サ レ ム を 含 め て シ オ

ニストの入植地などの返還を考えているわけではない。

また、米帝自身をとつてみても、**「イスラエル」**が現在の占領地を維持することはできないと考えているが、全面的な占領地の返還やパレスチナ独立国家の承認は、「イスラエル」の生存を脅かすものとして承認はしない。この点は六月初めのシュルツの中東歴訪時に明確にしている彼らも労働党と同一の立場にたつており、部分的な返還とパレスチナ人の限定的な自治のみを承認する立場でしかない。しかも、大統領選を控えて、レーガン政権はシオニストに反対できない立場にある。また、次期大統領の有力候補である民主党のマイケル・デュカキスは、レーガン政権よりももつと親シオニストの立場に立っており、米帝がPLOを承認し、シオニストに圧力を加えるということはまったく幻想にすぎない。

この動きの裏には、アルジエ・サミットでアラファト議長とサウジアラビアなどのアラブ反動との間で、蜂起支援の見返りとして、米帝との交渉のためにPLOの立場を和らげることが確認されていた可能性がある。なぜならこのアブ・シャリフ文書はすでにアルジエ・サミットで配

布されていたものであるし、また、  
サウジアラビアが米帝とPLOの交  
渉の場を提供すると申し出ているこ  
となど、さらにはシリアとの対立を  
引き起こすように行動するなど、裏  
取引きがあつた可能性がある。  
いずれにしても、今のところ米帝  
・シオニストが妥協する可能性は少  
ない。PLOの妥協的な態度は何ら  
米帝の態度を変更させるものにはな  
らないだろう。反対にPLOの再分  
裂がそれによって引き起こされる可  
能性が高まっている。この危機の回  
避のためにはアルジェの統一大会の  
前提がアンマン合意の破棄であった  
ように、これはPFLPなどのPL  
O内左派がPLO内でアブ・シャリ  
フ文書を否定させることしかない。  
このアラファト議長の政治展開は、  
これまでPLOとシリアの和解に努  
力していくPFLPの立場を困難に  
している。

### 三 シリアとレバノン

ベイルート郊外のシャティラとボ  
ルジバラジネの両キャンプでの戦闘  
は、アブ・ムサ派の攻勢によつて、  
アラファト議長派が両キャンプから  
追い出されて、終わった。シリア軍  
とリビアの保護のもとでアラファト

三

議長派兵士はサイダ郊外のキャンプに撤退した。六月二七日シャティラでアラファト議長派の五〇人の戦士が降伏した。アブ・ムサ派はシャテイラキャンプを占拠した。そして、アブ・ムサ派はすでに砲撃を行つていたボルジバラジネキャンプのアラファト議長派に、五月一日以前の状態に戻し、撤退しなければシャティラと同様の攻撃を行うと警告したしかし、アラファト議長派はそれを拒否し、徹底抗戦するという立場を表明した。

アブ・ムサ派は、アラファト議長とシリアのアサド大統領との六年ぶりの会談の直後にはじまつた戦闘でアラファト議長派によつてベイルート郊外のキャンプから叩きだされたその後アブ・ムサ派は全兵力を他の地域から動員し、逆包囲し、アラファト議長派に対する戦闘を継続し、武器も一五五ミリ砲や戦車までを動員して、徹底した攻撃をキャンプに加えた。そして、前日に一方的な停戦を宣言した直後に、大攻勢をかけてシャティラを陥落させた。シャティラは完全に破壊されつくし、「キャンプ戦争」で破壊されていたものが完全に瓦礫の山にしてしまつた。パレスチナキャンプの住民たちはこ

・ムサ派の九〇人が参加し、そのま  
ま、アラファト議長派に寝返ってし  
まつたことに端を発している。アブ  
・ムサ派はこれによつて、南部での  
影響力を失い、危機的状況に陥り、  
そのためベイルートのキャンプで影  
響力の維持のためにアラファト議長  
派を攻撃はじめたのである。

しかし、アブ・シャリフ文書は、  
アブ・ムサ派を勇氣づけ、戦闘の状  
況を一変させた。シャティラでは、  
「キャンプ戦争」のときにアマルが  
陣取つていたポジションにアブ・ム  
サ派が陣取り、キャンプを包囲する  
形で攻撃を行つていた。そして、決  
定的になつたのはそれまで傍観して  
いたシリア軍がアブ・ムサに共同し  
はじめたことであつた。シリアは、  
シリア派内の戦闘の時と同様に、パ  
レスチナの内部問題であり、介入し  
ないという態度を貫いた。しかし、  
シリアの態度も、このアブ・シャリ  
フ文書の発表以来明確にPLOに対  
する態度をもとに戻し、PNSFを  
支援する態度を明確にし、アラファ

アラブ・シリヤ文書を否定した  
蜂起民族統一指導部は、ペイルー  
トの内戦を非難し、シリアとアラブ・  
ムサ派を非難したが、この文書につ  
いては触れなかった。  
アラブ・シリヤ文書はアルジェ・  
サミットで勝利したパレスチナ革命  
派を再び分裂と混乱の危機に追いやつ  
ていている。  
これはこれまで統一した行動の影  
に隠れていた蜂起をどのように発展  
させるのかをめぐるアラファト議長派  
と反アラファト議長派の対立を公  
然化させることになった。アラファト  
議長派は、蜂起の当初から「亡命  
政権構想」など、米帝との取引が行  
いえる条件を、蜂起の力を背景とし  
て作り上げようとして、反アラファト  
議長派勢力からの反対を受けて、そ  
れを引き込めたりしていた。

条件的に見れば、蜂起の闘いによ  
つて、米帝の「和平工作」を葬り去  
り、全アラブ諸国を人民蜂起支援と  
PLOのパレスチナ人民の唯一合法  
の代表としての地位を再確認させ、  
アラブでのPLOの地位と蜂起の継

現在のアラファート議長の仕方は、アンマン合意と同様にPNCの決議を無視し、アラファート議長個人の政治技術をもつて、それを行おうとしているにすぎないし、それがPLOの分裂を導き、PLOの政治的地位の低下につながったことを教訓としているとは思えないやり方である。

アンマン合意の時も、アラファート議長は先に合意の既成事実をつくりそれを承認させるためだけのPNCを反アラファート議長勢力を排除して開催し、アンマン合意を承認させた。今回もまた八月にPNCをバグダッドで開くという噂がでており、米帝との合意を急いで、それを既成事実としてPNCに承認させようとしていると思われる。

PFLPなどのPLO内左派はこうしたアラファート議長派の蜂起を外交の武器として使うやり方に反対し蜂起の強化と市民不服従運動をとおした人民権力の実態の形成にこそ重点をおくる必要があると主張して、蜂

関係に否定的な立場をもつておらず、アラファート議長派の「イスラエル」人ととのコンタクトに否定的な態度をとっていた。また、PFLP・IGCなどのPLOの外にいる勢力はもともと全土解放の立場を崩しておらず、いつさいの話し合いを否定しており、今回のアラファート議長派の動きはいつさいの承認しないだろう。

しかし、アラファート議長派はレバノンでのアブ・ムサ派との戦闘を利用し、自らをシリアとアブ・ムサ派の被害者にしてあげることによって、米帝との直接交渉の道へむけられ、被占領地の人民の支持を確保しようとしている。蜂起民族統一指導部がシリアとアブ・ムサを非難したなどなり、アブ・シャリフ文書に触れたかったのは、アラファート議長派の戦術が成功していることを示している。アラファート議長派はアルジェ、サミットでの成功以来、シリアとの関係改善の方向へ向かおうとしたが、たし、アラファート議長自身はサミット以前からシリアに対する挑発的態度をとつていた。

の不必要な戦闘のために家を破壊されただけでなく、兄弟が両派に別れて殺し合うという悲劇を生んでいる。パレスチナ難民たちは、「はづかしいことである」と言い、この戦闘の悲劇的な事態を嘆いていた。

さらに、ボルジバラジネでもアブ・ムサ派の大砲や戦車を動員した攻勢の前にアラファト議長派は追い出されてしまった。

アブ・ムサ派はアラファト議長派を武装解除したにとどまらず、中立を保ち、停戦に努力したパレスチナ各派をも武装解除し、アブ・ムサ派の完全な一派による支配を作り出した。

しかし、この大攻勢は、すでに述べたように各派がアブ・シャリフ文書へ批判した直後から開始された。

アブ・ムサ派の武装力は一挙に増大した。そして、アブ・ムサ派がシリア軍がコントロールしている地域から砲撃を行い、キャンプの周辺もまた、シリア軍が展開しており、シリア軍が協力しなければこうした攻撃を行えないこと、アブ・シャリフ文書をめぐつて、シリアがアラファト議長を公然と批判しはじめしたことなどから、シリアがこの攻撃を承認し、支援したことが広範に信じられている。

出馬を表明していないが、キリスト教徒のなかで独裁的な地位を維持しているレバニーズ・フォーシズの意志を実現できるものとして出馬することは確実と見られている。しかし、これはレバノン中央政府のない状態をつづけさせることになるだろう。

ジャジャバモスルム左派勢力にとって受け入れることのできない候補であるばかりか、シリアにあっても対決していく相手ではない。

また、他の候補者にしても、モスクワから出馬するアントニイ・アシレムが承認するような候補者は、P S Pから出馬する。

### 三 日帝と中東情勢

日帝外相宇野はトロント・サミット後六月二二日からシリア、ヨルダント・エジプト、イスラエルを歴訪した。宇野は帰国後「日帝の政治的役割が求められている」と報告した。実際、各国は日帝がそのあり余る金を使つて援助をばらまくことは反対しなかつた。また、米帝がシオニストを支持する立場からしか「和平工作」をしなかつたことからも、日本帝がアラブに近い立場からイスラエルや米帝に働きかけることを期待することは当然のことであった。

日帝の側の意図に関しては、さまざまな形でいわれてきたが、トロント

の統一にはありえないことを明確にできる。

現在のパレスチナの内紛をとおしてシリアの治安計画の実現は、右翼キリスト教徒がシリア支配地区でのテロ活動による混乱を作り出す活動を強めてくるだろう。また、右翼内の対立も激化するだろう。とくに独立派の自己の勢力を維持しようとするところをこえて発言した。その重要な点としてはパレスチナ人民の独立国家建設の権利を承認したことである。この発言はパレスチナ組織にまで歓迎されることになった。しかし、パレスチナ独立国家の承認はシユルツ案にもないものである。また、「イスラエル」首相シャミルやペレスに對しても国際和平會議を受け入れることを要求したといわれている。また、デイヘイシヤ難民キャンプを訪問し、住民との対話と五〇万ドルの金を援助した。

こうした歴訪中の政治的な発言と、帰国後のシユルツ案について各國の反応をきいてきたことを強調していることとの間に大きな開きがあることに気がついていないのか、歴訪中の発言がリップサービスにすぎないのか、あるいは、日帝自身がそのような立場にないことは明確である。しかし、パレスチナ革命にとつてこの日帝の

1988年8月31日 第37号

アマルは敗北したもののシリア軍がはじめてベイルート南部郊外に展開し、ヒズボラーの支配地域を完全に包囲した。そして、いま、アマルに行わせていたパレスチナ・キャンプ武装解除の実現をアブ・ムサ派を使つて実現したと信じられている。

これは、レバノン大統領選挙を九月に控え、シリア軍は治安計画の実現を図ろうとしており、シリアは内部対立を利用してそれを実現している。すでに次の展開として、ドルーズ地域の山岳部でのシリア軍と民兵政治を終わらせるにあり、シリア軍の展開を行つており、サイダまでのシリア軍の展開を予測する人々もいる。この目的は、全民兵の武装解除の展開を行つており、サイダまでのシリア軍の展開を予測する人々もいる。また、そのために、米帝とシオニストの庇護のもとに右翼キリスト教地区との力のバランスをつくり、レバニーズ・フォーシズなどの民兵を解体させることにその目標をおき、それを米帝との交渉によつて、実現しようとしてきた。一方、アラファト議長は独自の政治的・物質的な基盤を確保する場としてレバノンの九月の大統領選挙をスマーズに進行させることによって、シリアの治安と民兵政治を終わらせるにあり、シリアの民兵組織「人民解放軍」が当初アラファト議長派戦士がサイダに戻ることを拒否した。また、西ベイルートのレバノン政府当局者も、アラファト議長派戦士がサイダにいくのに反対した。これらの反応はサイダで再びトラブルが起こることをさけた

。これはアマルとヒズボラーの戦闘でアマルは敗北したもののシリア軍がはじめてベイルート南部郊外に展開し、ヒズボラーの支配地域を完全に包囲した。そして、いま、アマルに行わせていたパレスチナ・キャンプ武装解除の実現をアブ・ムサ派を使つて実現したと信じられている。

これは、レバノン大統領選挙を九月に控え、シリア軍は治安計画の実現を図ろうとしており、シリアは内部対立を利用してそれを実現している。すでに次の展開として、ドルーズ地域の山岳部でのシリア軍と民兵政治を終わらせるにあり、シリア軍の展開を行つており、サイダまでのシリア軍の展開を予測する人々もいる。この目的は、全民兵の武装解除の展開を行つており、サイダまでのシリア軍の展開を予測する人々もいる。また、そのために、米帝とシオニストの庇護のもとに右翼キリスト教地区との力のバランスをつくり、レバニーズ・フォーシズなどの民兵を解体させることにその目標をおき、それを米帝との交渉によつて、実現しようとしてきた。一方、アラファト議長は独自の政治的・物質的な基盤を確保する場としてレバノンの九月の大統領選挙をスマーズに進行させることによって、シリアの治安と民兵政治を終わらせるにあり、シリアの民兵組織「人民解放軍」が当初アラファト議長派戦士がサイダに戻ることを拒否した。また、西ベイルートのレバノン政府当局者も、アラファト議長派戦士がサイダにいくのに反対した。これらの反応はサイダで再びトラブルが起こることをさけた

。これはアマルとヒズボラーの戦闘でアマルは敗北したもののシリア軍がはじめてベイルート南部郊外に展開し、ヒズボラーの支配地域を完全に包囲した。そして、いま、アマルに行わせていたパレスチナ・キャンプ武装解除の実現をアブ・ムサ派を使つて実現したと信じられている。

これはアマルとヒズボラーの戦闘でアマルは敗北したもののシリア軍がはじめてベイルート南部郊外に展開し、ヒズボラーの支配地域を完全に包囲した。そして、いま、アマルに行わせていたパレスチナ・キャンプ武装解除の実現をアブ・ムサ派を使つて実現したと信じられている。

これはアマルとヒズボラーの戦闘でアマルは敗北したもののシリア軍がはじめてベイルート南部郊外に展開し、ヒズボラーの支配地域を完全に包囲した。そして、いま、アマルに行わせていたパレスチナ・キャンプ武装解除の実現をアブ・ムサ派を使つて実現したと信じられている。

これはアマルとヒズボラーの戦闘でアマルは敗北したもののシリア軍がはじめてベイルート南部郊外に展開し、ヒズボラーの支配地域を完全に包囲した。そして、いま、アマルに行わせていたパレスチナ・キャンプ武装解除の実現をアブ・ムサ派を使つて実現したと信じられている。

これはアマルとヒズボラーの戦闘でアマルは敗北したもののシリア軍がはじめてベイルート南部郊外に展開し、ヒズボラーの支配地域を完全に包囲した。そして、いま、アマルに行わせていたパレスチナ・キャンプ武装解除の実現をアブ・ムサ派を使つて実現したと信じられている。

これはアマルとヒズボラーの戦闘でアマルは敗北したもののシリア軍がはじめてベイルート南部郊外に展開し、ヒズボラーの支配地域を完全に包囲した。そして、いま、アマルに行わせていたパレスチナ・キャンプ武装解除の実現をアブ・ムサ派を使つて実現したと信じられている。

員会とのかかわりの停止。人民委員会のこの呼びかけに従うよう人民を動員する役割を担うこと。

四、税金を支払わないこと。工業製品であり、農業製品であれ、すべてのイスラエル産の生産物のボイコット。また、セツルメントでの労働のボイコット。

五、ガザの我が人民は、新身分証明書への切り替えをボイコットすべきである。人民委員会は指導部に従つてボイコットを強化するため役割を果たすべきである。

六、人民委員会は、厚生、情報の各委員会、特別部隊形成、組織化の強化と継続を行うこと。経済と家畜飼育、農業生産を強化すること。

七、指名された村自治体委員会の人々の意思を外れた者に対する攻撃を強めること。敵に対して、石から火炎びんまでの人民の戦いを強めよ。

蜂起民族統一指導部は、来たる日を怒りの日々にすることを呼びかける。以下は、日々のプログラムである。

(一) 五月二八日、二九日は、大デモの日である。すべての委員会、機構階級は、サミットに届くまで我々の声を高めさせるために、この大デモ

20

(二) 五月三〇日は、ゼネストと闘争のエスカレートの日であり、それによつて、ゴルバチョフーレーガンのサミットに衝撃を与える。すべての町、村、キャンプに民族スローガンとパレスチナの旗を掲げよ。

(三) 六月一日は、国際平和の日である。子供たちはデモを行い、パレスチナの民族スローガンを掲げなければならない。そして、レバノン人民との連帯委員会は、殉教者、拘留者追放者の子供への贈り物を行うこと

(四) 六月三日、四日は、シュルツの訪問と、レバノン侵略、二一年間のシオニストによる被占領地の占領に対するゼネストの日である。特別部隊は、イスラエル軍とシオニスト・セツラーと対決せよ。そして、ファシスト占領者と裏切り者の足の下にある土地を燃やせ。

(五) 六月七日は、蜂起へのアラブの連帶の日である。多くのデモが行われるべきである。アラブ人民もまた蜂起に連帶してデモを行うよう訴え

\*\*\*\*\* P L O 被占領地蜂起民族  
統一指導部アピール一九  
号 “蜂起の拘留者の呼び  
かけ”

一九八八年六月八日

蜂起民族統一指導部は、蜂起による利益と優位を高め、あるアラブ諸国が示したシユルツ案と個別的解決へのイニシアチブを非難し、ラビンと会談した五人の裏切り者のパレスチナ人を非難する。また、アン・ナハール紙（注1）の疑わしい役割を非難する。

蜂起民族統一指導部は、自治体委員会、警察、税務署、交通局、身分証明書局からの即座の辞任、セツルメントの労働のボイコットを呼びかける。

蜂起民族統一指導部は、ガザの大衆の立場と、ゼネラル・ストライキに従つている商人を賞賛する。シオニストと裏切り者による疑わしいパンフレット、身分証カードによる新しいシステム、ガザ、西岸でパレスチナ人の車を狙った攻撃など、心理情報戦について警告する。

PLO被占領地蜂起民族  
統一指導部アピール一九  
号“蜂起の拘留者の呼び  
かけ”

(一) 六月九日は、蜂起の七カ月目を期して、ゼネストの日である。

(二) 六月一日は、拘留者との連帶の日である。シット・インとデモが行われなければならない。

(三) 六月一三日は、人民権力の強化創設の日である。すべての地域で人民、特別委員会を強化、形成する日である。

(四) 六月一五日は、拘留されている学生に連帯するゼネストの日である。人民教育の強化。

(五) 六月一六日は、食糧、燃料など必要物資の備蓄の日である。

(六) 六月一八日は、パレスチナ人民の帰還、民族自決、独立国家建設の権利にかかるすべての PLO のスローガンの下に、闘争の大衆的エスカレーションの日である。また、人民の意思から外れた者を攻撃する日である。

(七) 六月一九日は、「民政」の部局の集団的ボイコットの日である。集団的辞任を行い、人民権力を強化すること。

(八) 六月二〇日は、殉教者の子供の日である。大デモを行い、殉教者の家族を訪問せよ。

(九) 六月二二日は、ゼネストの日である。

988年8月31日 第37号 月刊 中東レポート

中東情勢は、九月のレバノン大統領選挙、「イスラエル」の一ヶ月総選挙、米国大統領選挙を前にして、情勢はいぢうそう煮詰まつていくことになる。また、七月三日に起こったイランの民間機の米海軍艦による撃墜と二九〇人の民間人の虐殺は、ガルフ戦争に新たな様相を持ち込んでいる。

レバノンの大統領選挙をめぐつては、一方にシリアと右翼キリスト教勢力の矛盾、また、キリスト教徒を支援する米帝との矛盾が強まる。さらに、シリアとパレスチナ勢力の対立は台安計画の実現をうづつて強ま

側の米帝への歩み寄りなど米大統領選挙への影響を与えるための動きが強まるだろう。

パレスチナ革命の分裂の危機は、蜂起が発展するかぎり、回避の努力が行われる。しかし、今回のアラファト議長派の動きは、アンマン合意の教訓をまったく無視したものである。パレスチナ革命が民族的に統一して蜂起を発展させていくためにはアラファト議長路線をもう一度破棄させ、パレスチナの民族的合意に基づく外交展開に転換させなければならぬ。蜂起自身の持つべき性質によれば、蜂起は自身の持つべき性質によれば、蜂起は自身の持つべき性質によれば、

不服従運動に到達するまでに蜂起の機関の組織化を呼びかける。これら的要求とスローガンは、ジユネーブ憲章の実践の必要性を示している。それは、我が人民の安全と市、村、キヤンプからのシオニスト兵の撤退、追放者の帰還、税金などのあらゆる支配の廃止、村自治体の民主的選択、工業、農業、サービス部門の発展の可能性を与える民族的経済の自由のための国際監視団をおこすこと。

三、占領当局の監獄から脱出するまでの政  
治犯の釈放を行い、我が人民の蜂起  
支持の可能性を与えるアラブ人民へ  
民主的自由を与えること。アラブ国  
境からのパレスチナ・フェダイン  
の戦いを許可すること。

市民不服従運動の途上にある民族  
統一指導部は以下のことを確認する。  
一、交通局、身分証発行局、住宅局  
などの被雇用者の即時辞任の必要性。  
二、占領軍による学校再開後におい  
て、バカラリアを失った学生への教  
材を与える折、プログラムに従うこ  
とが必要になってきた。人民の教育  
機関は、続けられるべきである。

対して支援する役割を果たすことは明確だろう。

ることは明確である。それは、アブドゥル・ムサ派とアラファト議長派の対立の形をとつて進行させられるだろう。さらに、イスラエルの総選挙は、世論の右傾化にともなつて、パレスチナ人に対する強硬な弾圧メジャーがとられていくことになるだろう。とくに、対話を求める勢力は、その地盤を失い、蜂起の発展は、シオニストと人民の対決を、決定的なものに高めていくだろう。

PLO被占領地蜂起民族  
統一指導部アピール一八  
号“子供たちの呼びかけ

資料①

こうした動きを克服していく  
この他に道はない。  
\*\*\*\*\*  
スローガンや、非難や、演説のみで  
はなく、パレスチナの闘争に対する  
責任を果たすことを要求する。それ  
は、

の間に合意を作りたいということから、何でもやってみたとしても、この種の合意がイスラエルとの合意ということにはならないと思うが。我々は、シモン・ペレスの「労働党」、イツハク・シャミルの「リクード連合」、または、イスラエルが、代表として選出したどんな相手とも話し合う用意がある。

イスラエルとシユルツは、自分の選んだペレスチナ人と交渉するのを望んでいたが、交渉権を与えられていない相手と話すのは、彼らにとっても、我々にとつても、無益である。そして、もし、我々が考えるよう、彼らが、ペレスチナ人との間に合意を作ろうとして何でもやっているのだとしたら、ペレスチナ人の代表と交渉しなくてはならないし、ペレスチナ人は、手にしている手段をもって、自らの代表をすでに選んでいる。外国の外交官、記者に、あなたの代表は誰かと聞かれたら、どんなペレスチナ人も、PLOであるとすぐに回答するだろう。そして、それがペレスチナ人の自由意思なのだとしたら、あらゆる躊躇する人々をも確信させるやり方で、ペレスチナ人が自由意思を表現する方法を与えるべきだ。そして、西岸、ガ

ザにおいて、国際的監視下の住民投票を行い、イスラエルや米国が申し出ているパレスチナ人の他の団体と PLO とどちらを選ぶのか、やらせなければならない。PLO は、そうした結果がいかなるものであれ従うし、パレスチナ人が選んだのなら、PLO に代わるどんな指導部にも道を明け渡そう。PLO は、本当にそうするつもりである。なぜなら、PLO の存在理由は、イスラエルの破壊にあるのではなく、パレスチナ人民と非パレスチナ人民の権利—自らの未来を決め、民主的に意見をのべるという権利を含めて—の救済にある。

きにでてくるそうした恐れは、P L O が、国連安全保障理事会決議二四二、三三八に無条件合意したこと、西岸、ガザにパレスチナ国家建設を掲げているという危険性しかも、その国家は、過激派で、全体主義的で、近隣国にとっては心配の種になるということによった。

いすれにせよ、P L O は、二四二三三八は受け入れる。それを公式に表明できてこなかったのは、二つの決議の内容に問題があるのではなく盛りこまれていない点を問題にしてきたからである。なぜならそれらの決議は、自決権、表現の自由をも含んで、パレスチナ人の民族権について触れていないからである。それゆえ、国連の決定であり、それが、パレスチナ人の民族的権利を承認しているという意味において、二四二、三三八を受け入れると確認してきたパレスチナ国家創設の危険性といふことでは、それが近隣諸国への警告になりうるのだが、執行、立法、大衆的レベルでの P L O の民主的性格から、それは取り越し苦労であるということで十分ではあるが、アラ

被占領地をパレスチナ民主国へと向けていくための国際信託下における暫定的な期間の決定に賛成しよう。その後、パレスチナ人は、地域の全国家のみならず、パレスチナとイスラエルも含む国際的保障を与えることに合意する以上に、その保障を与えるように主張し続けるであろう。

こうした保障を得るという我々の欲求は、イスラエルとの直接和平交渉要求の防衛なのであり、そして、それは、国連監督下の国際会議の中身とたまたま一致するのである。

パレスチナ人は、イスラエルの戦争態勢、力量、核の力を知っている分、イスラエルがパレスチナ人を恐れるのを正当化するよりも、イスラエルを恐れる権利があると感じている。しかし、たとえそうであってもパレスチナ人は、イスラエル一派スチナ国境の側に国際分割軍配備を含めて、自国と近隣諸国の安全を発展させるいかなる論理的な動きをも受け入れるだろう。

時間は、時には、傷を癒す最も良い医者だが、明らかに、多くのイスラエル人はそのことを知つておらず、彼らはそうした感情を、未だそうして、その感情をもつていない人々に移して

いうことがわかるだろう。イスラエルの目的は、確固とした平和と安全であり、パレスチナ人も、やはり確固とした平和と安全を望んでいる。ユダヤ人が一〇〇年以上も被つてきたり苦難を、パレスチナ人よりよく理解できるものはいない。なぜなら、我々は、国家を持たない民族の意味を理解するし、だからこそ恐れ、國家を作るに至るということが理解できるからである。何代ものイスラエル政府のせいで、また、我が人民の生活に新しいスタイルを課す権威をもつっていた諸政府のせいで、他の人間よりも非人間に扱われたり、世界のすべての人が享受している基本的権利が与えられなかつたりしたら人間がどう感じるかということを知っている。ユダヤ人であれ、パレスチナ人であれ、恥辱を受けるのが当

る。それなく、どんな国も、どれほどどの軍事大国であろうと、自國の安全を保証することはできないし、また、どれだけ友好國からの尊敬を集めていようとも、自國の眞の發展を作ることもできない。

パレスチナ人は、恒常的な平和とそうした種類の安全を必要としている。それは、イスラエルも同じである。なぜなら、誰も、他者の崩壊の上に自らの未来を築くことはできないからである。これが、ほんの少しの人の除いたすべてのパレスチナ人の欲求、目的であることに間違はないと思う。

イスラエルが、そうしたパレスチナ人をとおして、恒常的な平和と安全をかちとるための手段は、直接交渉である。解決策を強要するとか、批判するとかいうようないかなる外

ステエル問題の解決の鍵は、パレスチナ－イスラエル間の交渉にある。イスラエルとの紛争を解決するのに非イスラエル人との交渉を通じてやりうるとパレスチナ人が考えるならそれは、自らを欺くことになるだろう。

米国務長官シュルツが、中東地域の和平へむけた提案をもつて、中東にまもなくもどってくるだろう。イスラエル人が、パレスチナ人との問題を解決するのに、ヨルダンをも含めて、非パレスチナ人の交渉でやりうると考えるなら、自らを欺くことになるだろう。

パレスチナ人は、イスラエル側の交渉相手を選びたいと欲している。我々の側は、ピース・ナウ運動との間に、一ヶ月の期間で、合意をつくすることも躊躇しない。イスラエルと

ある。すべての人は、土地に行つて  
そこで働く日である。すべての敵の  
工業、農業、権益を破壊するために  
放火せよ。

(+) 金曜日と日曜日は、殉教者への  
祈りの日である。大デモが行われな  
ければならない。

い隠してはいるが、両者が合意している点は、実際に存在している。そして、この地域に久しくなかつた和平が結局は実現して欲しいと望まれる。

たり前、権利のないのが当たり前、あるいは悪いのが当たり前のようになつたら、そういう人は、貧困に陥るしかないのは確かだろうと思う。ユダヤ人、パレスチナ人を含めて、すべての人民は自分たちのことを自分たちで管理する権利、そして、隣人から内政干渉を受けないだ

部の動きをも排したものとして。パレスチナ人は、その問題について今意するし、紛争の当事者同士の直接交渉なしにどんな紛争も解決できる可能性があるとは、我々は、考えない。さらには、外部の力に押しつけられたどんな解決策も、紛争当事者同士には受け入れられない」と考える。

いくだろ。そして、我々は、多くの問題がどのようにあらうとも、我には平和への準備ができる。と、我々は平和をかちとれることを知っている。そして、平和に到達するのに、今提起されている機会を失いたくないと望んでいる。もし、この機会が失われてしまったら、占領に抵抗するという我々の権利行使を続けるしかない。なぜなら、我々の最終目的は、我々が自由になること、威儀をもつて生き、自分たち自身の子供たちだけでなく、イスラエルの子供たちにも安全な生活を送らせることにあるからである。

PF-LP 副議長および PLO 執行委員会委員アブ・アリ・ムスタファ声明  
一九八八年六月二十五日

\*\*\*\*\*  
一〇日ほど前に、新聞その他が危険な政治文書について取り沙汰を始めた。この文書を配布したのはバツサム・アブ・シャリフが、彼（アラファト）は申し入れた。とくに、バツサム・アブ・シャリフが、彼（アラファト）は申しおねた。しかし、アラファト議長は、その要請に応えなかつた。

第三に、PLO 執行委員会議長が、同文書発表に個人的に関与している。さるには、アラファト議長が、自分の顧問の一人に同文書を持たせたあるアラブ首脳のもとに送り、その首脳がワシントンの米政府に同文書を届けるよう計つてゐたのである。こうした出来事、そして、執行委員会メンバーとしての私の立場から、パレスチナ人民大衆に対し、そして

ルの関心を示す動きの一つに、外國から帰国する住民の金の持ち込み規制や、外國から資金を受けている諸団体に対するしめつけがある。以前は、住民は、五〇〇〇ドル以上の持ち込みの時だけ申告しなくてはならなかつた。二月には、一〇〇〇ドル以上の持ち込みに変わり、三月には、「民政」当局の許可なく一〇〇〇ドル以上の持ち込み禁止に変わつた。三月、四月には、ベン・グリオン空港や、ヨルダン川の国境で、何十人も人が一〇〇〇ドル以上の超過分を没収された。その中には、少なくとも一〇人の米国市民も含まれおり、その米国市民の没収されたのは、八万五〇〇〇ドルに上るとされてい

る。駐イスラエル米国大使館は、これまでのところらちがあいてはいないが、少なくとも没収された米国市民が本国へそれらの金を送り返せるよう、金を返却するよう申し入れている。

「民政」当局者が、匿名という条件で話すには、通貨持ち込み規制の変化は、持ち込まれる金がPLOから送られたものでないことを確実にするため、そして、「他の敵対分子」から送られたものでないことを確実に

し、ペレスチナ人が（辞任したあと）別の職につくことができるか、失業保証を受けるかするまでは、このキャンペーンはほとんど効果がないだろ。といううのが、大方の見方である。月初頭に、アルジェで、蜂起の継続援助として、アラブ産油国からの大型援助を取りつけた。公式には、額は明らかにはされていないが、一億二〇〇〇万ドルから六億五〇〇〇万ドルとされている。

この金の問題についてのイスラエ

りさせておきたい。

第一に、パレスチナ指導機関の誰も、そしてどの部局もこの文書とは関係がないし、この文書について知るのに、今提起されている機会を失いたくないと望んでいる。もし、この機会が失われてしまったら、占領に抵抗するという我々の権利行使を続けるしかない。なぜなら、我々の最終目的は、我々が自由になること、威儀をもつて生き、自分たち自身の子供たちだけでなく、イスラエルの子供たちにも安全な生活を送らせることにあるからである。

として、我々は、次のことをはつきりさせておきたい。

第二に、この数日前、正確には六月二一日に、私は、執行委員会議長のヤセル・アラファトあてに速達を送り、立場を明確にするよう、その文書とは関係がないと明言するよう申し入れた。とくに、バツサム・アブ・シャリフが、彼（アラファト）は申しおねた。しかし、アラファト議長は、その要請に応えなかつた。

第三に、PLO 執行委員会議長が、同文書発表に個人的に関与している。さるには、アラファト議長が、自分の顧問の一人に同文書を持たせたあるアラブ首脳のもとに送り、その首脳がワシントンの米政府に同文書を届けるよう計つてゐたのである。こうした出来事、そして、執行委員会メンバーとしての私の立場から、パレスチナ人民大衆に対し、そして

にいる。さるには、アラファト議長が、ちが、議長の支持を得た上で、大衆蜂起に対する破壊的介入を行い、蜂起のすばらしい開示を損なつていの。我々は、どちら側であろうと、どんな人であろうと、蜂起の獲得物を損ない、闘争魂を弱めるようなことは、許せない。また、パレスチナの指導機関をとびこしたり、気分や

に対する闘争を低下させぬよう訴えてきた。

また、アラファト議長の側近たる西岸、ガザへ金を持ち込もうとする「数十人」を押さえたことに加えて、当局は事業や、施設の資金の流れにもきびしい規制を加えた。実際には、同じ上限が個人としては課せられたことになつておらず、ただ、外國から資金を受け取るときには、「民政」当局が、匿名という条件で話すには、通貨持ち込み規制の変化は、持ち込まれる金がPLOから送られたものでないことを確実に

として、我々は、多くの問題がどのようにあらうとも、我には平和への準備ができる。と、我々は平和をかちとれることを知っている。そして、平和に到達するのに、今提起されている機会を失いたくないと望んでいる。もし、この機会が失われてしまったら、占領に抵抗するという我々の権利行使を続けるしかない。なぜなら、我々の最終目的は、我々が自由になること、威儀をもつて生き、自分たち自身の子供たちだけでなく、イスラエルの子供たちにも安全な生活を送らせることにあるからである。

として、我々は、次のことをはつきりさせておきたい。

第一に、パレスチナ指導機関の誰も、そしてどの部局もこの文書とは関係がないし、この文書について知るのに、今提起されている機会を失いたくないと望んでいる。もし、この機会が失われてしまったら、占領に抵抗するという我々の権利行使を続けるしかない。なぜなら、我々の最終目的は、我々が自由になること、威儀をもつて生き、自分たち自身の子供たちだけでなく、イスラエルの子供たちにも安全な生活を送らせることにあるからである。

として、我々は、次のことをはつきりさせておきたい。

第一に、パレスチナ中央評議会の即月二一日に、私は、執行委員会議長のヤセル・アラファトあてに速達を送り、立場を明確にするよう、その文書とは関係がないと明言するよう申し入れた。とくに、バツサム・アブ・シャリフが、彼（アラファト）は申しおねた。しかし、アラファト議長は、その要請に応えなかつた。

第三に、PLO 執行委員会議長が、同文書発表に個人的に関与している。さるには、アラファト議長が、自分の顧問の一人に同文書を持たせたあるアラブ首脳のもとに送り、その首脳がワシントンの米政府に同文書を届けるよう計つてゐたのである。こうした出来事、そして、執行委員会メンバーとしての私の立場から、パレスチナ人民大衆に対し、そして

にいる。さるには、アラファト議長が、ちが、議長の支持を得た上で、大衆蜂起に対する破壊的介入を行い、蜂起のすばらしい開示を損なつていの。我々は、どちら側であろうと、どんな人であろうと、蜂起の獲得物を損ない、闘争魂を弱めるようなことは、許せない。また、パレスチナの指導機関をとびこしたり、気分や

に対する闘争を低下させぬよう訴えてきた。

また、アラファト議長の側近たる西岸、ガザへ金を持ち込もうとする「数十人」を押さえたことに加えて、当局は事業や、施設の資金の流れにもきびしい規制を加えた。実際には、同じ上限が個人としては課せられたことになつておらず、ただ、外國から資金を受け取るときには、「民政」当局が、匿名という条件で話すには、通貨持ち込み規制の変化は、持ち込まれる金がPLOから送られたものでないことを確実に



## TOKYO後記

八月八日本外務省は、イスラエル占領下でのパレスチナ住民追放問題で、イスラエルの姿勢を改めて強く非難する談話を発表した。

談話では、イスラエル政府が一日、再びパレスチナ住民八人を南レバノンに追放したことを指摘し、「日本の申し入れはもとより国連安保理決議を含む国際世論の非難を無視するとともに被占領地情勢を一層悪化させるもので、日本はこれを強く非難する」と強調している。

さらに宇野外相が先のイスラエル訪問の際に会ったパレスチナ人代表の一人であるファイサル・フセイニ氏（パレスチナ人の代表的ジャーナリスト）に対して、イスラエル政府が七月三一日行政拘禁処分をしたことにについて「関係者による和平実現への対話努力に逆行するもので、日本としても今回措置に対し強い懸念を有す」と批判した。

☆

ロンドンのエコノミスト誌は「中東は日本外交の幼稚園である」（三

六号資料⑤参照）と書いているが、彼らからみると、これまでの日本は赤子なみの外交をしていたにすぎぬわけだ。中東こそ逃げ腰から大胆な「平和協力」外交へ転ずるチャンスと考える、という識者の期待感ある論文が月刊誌にのる。☆

中東訪問前の宇野外相の「口先だけや札束だけの外交はだめだ、汗をかかなきやならん」との言葉が、先掲の談話のあらわれか……。

先号資料⑥と本号の「日帝の中東情勢」を併せて注目されたい。

☆ ☆

本号では、バッサム・アブ・シャリフ氏の文書を取り上げている。文書のもつ意味を批判しながら文書そのものを資料③に紹介している。この文書の存在は日記欄では六月一六日になつていて、TOKYOで新聞面で紹介されたのは、七月二日付の産経新聞で外信部長名の解説記事が掲載されたのがはじめてではなかろうか。記事は、「ある米政府筋は「もしこれが新政策なら大きな変化だ」と評した。また米国の著名なコラムニスト・アンソニー・ルイ

ス氏は「イスラエル人とパレスチナ人の対立の歴史において最も重要な文書」といささか大げさとも思えるコメントをつけた」と書き出してかわだ」と結んでいる。

米国としてはアブ・シャリフ文書のトーンとPLOの真意を探り出すことに少なからぬ関心を抱いている。コメンタリートークをつづけたと書き出してから文書の内容に及んでいる。そして

その間ヨルダン・フセイン国王のシリヤ訪問、ヨルダンとPLOの協議開始、マーフィ米国務次官補のイスラエル訪問と交流が激しい。☆

七月三一日、ヨルダンのフセイン国王は、ヨルダン川西岸地区の主権放棄を宣言した。

☆

PLOのアラファト議長は、クトーで「ヨルダン川西岸との法的、行政的結び付きをすべて断ち切るとのヨルダン決定に従い、PLOはパレスチナ亡命政権を樹立することを考慮中である」と発表した。

☆

一方イスラエル空軍は連日のごとく、レバノンを襲撃しているとの報道が、一段記事になつてつづいている。

占領地でのパレスチナ住民による流血の反イスラエル闘争の火は燃えたぎつていて。

☆

確実に情況は激動している。

（現地からのレポートに一ページ余白が生じたため記す）

八月七日セイイン国王は「ヨルダンの統治権放棄で『空白』となつたイスラエル占領下のヨルダン川西岸

とガザ地区に、パレスチナ解放機構

（一九八八・八・一五）

☆

九月PFLPのジョージ・ハバシ議長は、亡命政権樹立を躊躇せず実行をすることを支持すると報せられている。

☆